

もっと知りたい

武者小路実篤

む ちゆう
夢中になった芸術家 3

セザンヌ

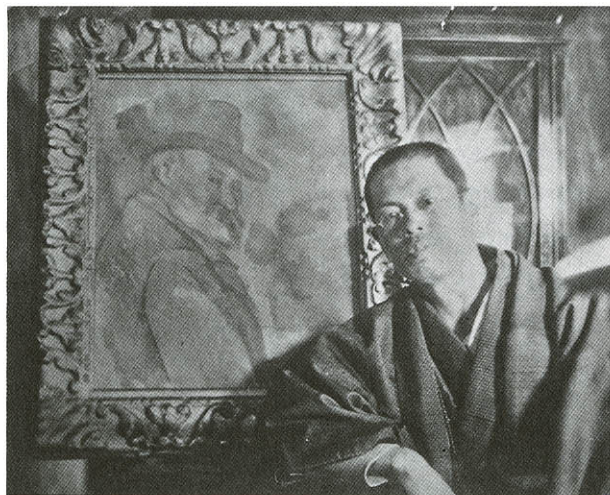
しら かの
～白樺美術館物語・3～

白樺美術館とセザンヌ



セザンヌ「風景」1885-87年

現在は公益財団法人 大原美術館所蔵（白樺美術館より永久寄託）



セザンヌの「帽子をかぶった自画像」と実篤 大正10（1921）年頃
このセザンヌ作品は、細川護立氏が白樺美術館のために購入したもので、現在はブリヂストン美術館所蔵。

子どもの頃から、絵を描くことには劣等感を持っていた実篤ですが、画集などを通じて絵を見ることには若い頃から熱心でした。明治時代に実篤らが創刊した雑誌『白樺』は、自分たちの夢中になった芸術家を多くの人に知ってもらうため、西洋美術を図版入りで紹介し、複製画などによる展覧会を開催したほか、美術館設立運動も起こしました。大正時代からは、実篤自身も美術品のコレクションを始めます。実篤にとって、美術とはどんな存在だったのでしょうか？

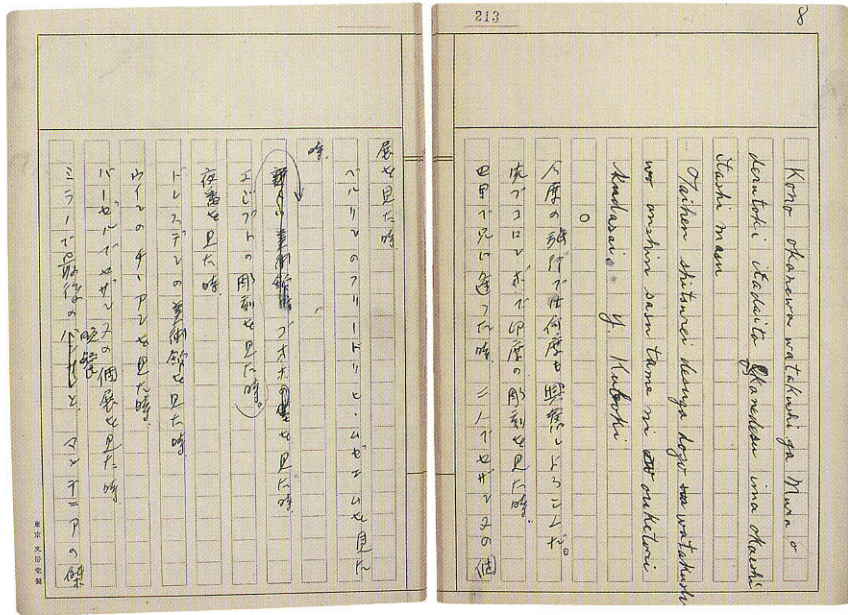
白樺美術館とは、大正時代に実篤らが考えた、西洋美術の実物を広く公開するための美術館のこと（「もっと知りたい37・38」も合わせて参照）。

まずセザンヌやゴッホの作品を手に入れたいとして、この構想の賛同者から募った寄付金でセザンヌの油彩画「風景」などが、ほかに協力者によってゴッホの油彩画「向日葵」などが購入されました。

白樺美術館の結末

購入した作品は、大正10（1921）年、東京・京橋で開かれた第1回白樺美術館展で公開されたものの、結果として美術館構想は資金不足により実現しませんでした。

美術館のために購入された作品は、現在は大原美術館、ブリヂストン美術館で見ることができます。



おうべい ざんまい 欧米旅行で美術三昧

ベルリン・オリンピックの開催された昭和11(1936)年、ドイツ大使をしていた兄の勧めによって、実篤は生涯にただ一度の欧米旅行の機会を得ます。

旅の一番の目的は何と言っても、若い頃から画集や複製画であこがれてきた、西洋美術の実物に触れることでした。

この旅行では、マチス、ルオー、ドラゴン、ピカソといった、名だたる芸術家たちに実際に会うこともできました。ピカソからは、エッチング「ミノローロマシー」を贈られるという驚きの出来事もありました。

実篤「湖畔の画商」原稿より
欧米旅行で印象に残ったことの一つに、パリでセザンヌ展を見たときのことを挙げる。

美術を語る



実篤の美術論



仙川の家でピカソから贈られた「ミノローロマシー」を見る実篤
昭和40年代後半

実篤は、雑誌『白樺』を出した若い頃から晩年まで、自分の心に響いた芸術家や作品について、感動や思い出を書きつづりました。特に欧米旅行から帰国した後は、多くの著書を出版しています。

作品を通して、それを生み出した芸術家の心に触れ、そこからエネルギーを得るというのが実篤の鑑賞法でした。実篤にとって美術品は、生涯を通じて身近にあり、また、なくてはならない生活の一部だったのです。

あなたも！

美術館に出かけて、作品をたくさん見てみよう！

そして、あなたの好きな作品を集めて、空想美術館を作ってみよう！

こんな人

ポール・セザンヌ (1839~1906年)

ポスト印象派のフランス人画家。「感動」を表現するという発想を絵画に採り入れ、近代絵画の父と言われる。りんごなどの静物画や、サント=ヴィクトワール山などの風景画で知られる。